

NHSJ Newsletter

第39号 2021年2月15日
日本ナサニエル・ホーソン協会事務局
〒274-0063 千葉県船橋市習志野台 7-24-1
日本大学理工学部 鈴木孝研究室内
E-mail: jimukyoku.hawthorne@gmail.com
公式 HP: <http://www.nhs-j.org/>
郵便振替 00190-1-66463

ご挨拶

会長 西谷拓哉

今年度、どこかで挨拶を聞く度に「コロナによって……」という言葉を目にする事となりました。まことに口惜しい限りですが、このご挨拶もそのような言葉から始めざるを得ません。それほど新型コロナウイルス感染症に振り回された一年でした。本協会も大きな試練にさらされ、5月の全国大会は不開催とせざるを得ませんでした。このパンデミックは協会の研究活動にとって「壁」であり「制約」であったことに違いありません。本稿を書いている今も、国外においてコロナウイルスの変異種が見つかり、国内においても「第3波」の勢いは衰えを見せるどころか、感染の拡大が続いています。

しかし、ここであえて申し上げたいのは、この苦境にけっして浮き足だつてはならないということです。制約を逆に肯定的に捉え、動けないなら動けないなりに、できることはあるはずで、遠隔会議システムによる学会活動もその一つです。しかし、ここで言いたいのは、そのような技術的対応ではなく、「内省」ということです。ここでの「内省」とは自分の研究の必然性をあらためて問うということです。これは何も学問の実用性と有用性を問うということではない。たとえ、外的な条件・環境がどのようになろうとも、自分がその研究をすることの意味、あるいはそれを続ける意志、それらが揺るぎないものであるかどうかを今一度考えてみるということです。研究の核心は、さまざまな意味での「壁」や「制約」によって研ぎ澄まされていくはずで、自分の研究発表の聞き手が同分野の人であれ他分野の人であれ、聴衆の心を打つのは、まずもってその発表の中にある「揺るぎなさ」にほかなりません。

吉村昭『破獄』（1983年）という小説があります。刑務所を四度にわたって脱獄した男を描く記録文学です。主人公の佐久間精太郎は、看守の執拗な監視、頑丈な手錠と足錠、分厚い壁や床板にもかかわらず、それらの外的制約をじつと綿密に観察し、そこに生じている、ある「ゆるみ」を見逃しません。そこを突いて、脱獄不可能とされた刑務所から易々と逃走するのです。主人公はやがて温情ある刑務所長と出会い、改心し、出所します。不思議なことに、この小説は、その後、主人公が亡くなるまでの生涯をあっさり数ページで語るのみです。刑務所内での佐久間を描く緻密な前半部に比べ、あっけなく小説は終わるといってもいいのですが、しかし、この構成にこそ、この小説が本当に語りたかったことが隠されている。つまり、刑務所の高く分厚い「壁」こそが、主人公の頭脳と知力をいきいきと生動させる原因であったということです。

私たちが現在、ある種の閉塞状況にあると断言していいでしょう。しかし、それを嘆いていても生産的ではない。今はとにかく自分がよって立つ知的体力を鍛えておくことに専心し、「破獄」の機会を狙うこととしましょう。思えば10年前も我々は東日本大震災に直面し、茫然自失しながらも、やがてそれを乗り越えようとしてきました。このコロナの状況もやがては収束して、「より明るい時代が到来し、新しい真実が明らかにされる」——その日が来ることをともに信じようではありませんか。

特集：コロナ禍で問い直す文学

沖縄で開催予定だった今年度の全国大会は、新型コロナウイルスの影響で残念ながら中止とせざるを得ませんでした。そこで今回の *Newsletter* には、従来掲載していました全国大会発表者による英文要旨に代わり、「特集：コロナ禍で問い直す文学」と題して、コロナ禍にまつわる4つのテーマを内容としたエッセイを、8名の会員の先生方に執筆していただくことといたしました。様々な視点から問い直された、まさにこうした時期のいまだからこそその文学との付き合いかたを、是非お楽しみいただければと思います。

鈴木 孝（日本大学）

◆テーマ1◆ 感染

断絶と繋がり of 感染表象

——フォークナーとアメリカン・ルネサンス文学の場合

小南 悠（関西学院大学博士課程後期課程）

1898年のある日、幼い四兄妹が屋敷の一室で眠りに就く——フォークナーの『響きと怒り』第1章は、物語の現在から数えておよそ30年前のそうした情景を描きつつ、静かにその追憶の幕を下ろしてゆく。その日、屋敷で執り行われている葬式から遠ざけられた子供たちは、夜の帳が下りてもなお、吊いの邪魔にならぬよう、いつもと違う部屋に四人一緒に押し込められる。それゆえ、「なんで今夜はここで寝なきゃならないの」というキャディの言葉は、子供らしい反発心の現れとして微笑ましく響いてくる。しかし、「ここは私たちがはしかをするとところよ」という何気ないひとことを思い合わせるなら、キャディの言葉を単なる子供のぼやきとして片付けるのは、あまりにもナイーブである(73)。四人は、はしか罹患時と同様、この一室に隔離されるのだ。そうして、大人の世界からの疎外が、感染と隔離のイメージをとおしてほのめかされる。だからこそ、同じ日の夕餉の席で、無駄口を叩く兄妹に対して黒人召使いディルシーが「困らせるんじゃない」と言うとき、^{ベスト}を語源とする“pester”という動詞を（通例に反して自動詞の形で）用いているのは、決して偶然ではない(26)。そしてまた、30年の月日が経った物語の現在、この〈はしかの部屋〉はキャディの一人娘クエンティンの寝室になっているのだが、この部屋が外から鍵をかける仕組みであることが幾度となく強調されてもいる。〈はしかの部屋〉は、文字通り、一家の放蕩娘を^{ロックダウンする}隔離室と化しているのだ。したがって、この放蕩娘が^{ステイ(アット)ホームする}屋敷に留まることなく男と出奔する物語の結末を踏まえるなら、感染源の隔離とその破綻という構図をこの作品から読みとってよい。『響きと怒り』の空間表象に潜在するのは、感染と隔離の主題なのである。

フォークナーが生きた時代は、史上最多の死者数を出したスペイン風邪の時代でもあった。アルフレッド・クロスビーが指摘するように、フォークナー作品にはスペイン風邪への言及は見当たらないが、彼の所属していた空軍部隊でも士官の四半がこの疫病に罹ったと言われており(316)、感染への意識は、様々な感染症／疫病表象の形を借りて、彼の作品に確かに刻み込まれている。そして、『響きと怒り』の場合、それは隔離の問題に接続する。カミュが『ペスト』の中で、疫禍がもたらす「最も深刻な苦痛」は「別離」とであると書き綴ったように(266)、感染の主題はまずもって、他者との断絶の問題に結び付くのだ。

感染の主題が前景化するのには、切断された他者との関係性であるということだが、フォークナーとはまた異なる視点から、この主題を創作に活かした者もいた。19世紀アメリカン・ルネサンスの作家たちである。当時、感染という概念そのものが孕む伝播性こそ、文学言説において最も広く用いられた隠喩のひとつであった——そう看破するのは、ディヴィッド・ミラーである。そもそも、度重なるコレラの流行に見舞われた19世紀は、

感染症対策の考案や病原菌説の提唱など、まさに疫病と近代疫学確立の時代であった。とりわけ、南北戦争以前は、瘴気説をはじめ、動物磁気を用いた催眠術や降神術、あるいは電気のイメージリーの流行など、大気中に充満する不可視の流体への関心が高まった時期でもあった。そうした時代潮流の中、感染の概念が、病いの文脈のみならず言語や感情など様々な文脈で、人から人に〈うつる〉ものの比喩として、その意味を拡張していったという。そうしてミラーは、メルヴィルやポーといったロマン主義作家の感染表象を、いわば人間同士を繋ぎ合わせる隠喩として掬いとる（第9章）。19世紀は、感染の主題にとり、繋がりという文脈から豊富な磁場を提供した転換期であった。

感染は、断絶と繋がりを同時に志向する、きわめて逆説的な概念である。コレラ流行から200年、スペイン風邪の蔓延から100年が経った今、両義的な感染表象に彩られた文学空間に身をゆだねてもよいだろう。繋がっているからこそ断絶するのであり、断絶の中でこそ繋がるものがあるのだから。

引用文献

Crosby, Alfred W. *America's Forgotten Pandemic: The Influenza of 1918*. Cambridge UP, 1989.

Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. 1929. Vintage International, 1984.

Miller, David C. *Dark Eden: The Swamp in Nineteenth-Century American Culture*. Cambridge UP, 1989.

カミュ、アルベール『ペスト』宮崎嶺雄訳、新潮社、2020年。

感染と青い電燈

成田 雅彦（専修大学）

今年2020年は、コロナ禍の生活元年として記憶に刻まれる年になるだろうが、この感染症は世界中で人々を同じ運命に巻き込もうとする一方で、人々を孤立無援に追い込むという意外に深刻な副作用を伴うことが明確になってきた。感染を恐れて高齢の親族と会うことが難しくなり、友人や時には家族とも自由に会えない。人々は街に集うこともかなわなくなり、孤立の中で自らの命を絶つ痛ましい事例も増えていると聞く。大学もオンライン授業で学生たちはキャンパスに集えない。教師の側にしてからが蟄居生活の中で自らを見失いそうにもなる。そんな時、ふとした折に宮沢賢治のある詩を思い出すことが多かった。それは『春と修羅』の序にある次のような詩句である。

「わたくしといふ現象は / 仮定された有機交流電燈の / ひとつの青い照明です / （あらゆる透明な幽霊の複合体） / 風景やみんなといつしよに / せはしくせはしく明滅しながら / いかにもたしかにとりつづける / 因果交流電燈の / ひとつの青い照明です / （ひかりはたもち その電燈は失はれ）」この詩を初めて知ったのは、大学院の頃、詩人・山尾三省の朗読会の折であった。賢治にとって、人間というのは青い電燈のようなものです。それは、まわりの人間たちや風景たちと無数に張り巡らされた電線で繋がっていて、その連帯の中ではじめて人は命の光を明滅させることができるのです。賢治の詩を朗読しつつ、山尾氏は確かそんなことを教えてくれた。孤独な院生だった自分はひどく感銘を受けた覚えがある。自分もまた風景や人々と交流電線で結ばれ、かすかに明滅する青い電燈なのであろうか。そう思うとどこか慰められるような気がした。

しかし、この詩は、コロナ禍の中、まったく別の相貌で甦ってきた。現在の感染の風景の底に広がっているのは、もはや緊密に結びついた青い電燈ではない。交流電線がいたるところで切断され、明滅することができなくなった暗い電燈の群れだからである。他人との絆だけではない。自分と自分の内面を結ぶ回路さえ断ち切られて自らを見失う。そんな嘆きがいたる所から聞こえてくる。これはコロナだけが引き起こしたものではないのかもしれない。この光景はすでに久しく現出していて、今回のコロナがそれを明確に可視化しただけなのだろう。しかし、これはまぎれもなく現在のコロナ禍が加速した危機的風景である。

こうした状況に対し非力な自分はもちろん何もできない。だが文学研究者の端くれとして、こんな時こそ文学や芸術が果たす役割があるのではないかという気もする。もちろん個々の破綻した絆の現場に出かけて行って、それを修復することはできない。しかし切り離され孤立していても、人は心に染みる物語によって救われることがある。コロナの感染が猛威を振るい、蟄居を余儀なくされる中でも、人は同じ人の生活や物語を知り、共感することでどこか癒されることがあるのだ。そもそも私たちが文学研究を志したのも、そうした経験があったからではないのか。自分にとって特別なある物語、一つの場面、あるいは一つの言葉に支えられて、ここまですべて生きて来たのではないか。物語とは、それを語る者と耳を傾ける者、そして読み手同志をも、目に見えない新しい絆で結びつけるものなのではないのか。そもそも賢治の夢想した交流電線そのものが、実は「物語」の糸で織られたものだったのではないのか。

むしろそれは肉親や友人との絆のように普段強く意識されることはない。しかし「読み手のコミュニティ」というものはある。そこで、かけがえのない絆を獲得するということはあるのだ。とすれば、文学の論考を書いたり、教室で、いやオンライン上でさえ、学生と物語を共有する仕事にもそれなりの意味があるはずだ。読み方の方法論や理論なども大切ではあるだろう。しかし何よりも物語の豊穡な世界を掘り下げ、人の感情の核に触れる感動を学生や他の人々と共有するという経験が、今は何より必要なのではないか。それがこのコロナ禍の中、新しい絆を作る契機となり癒しとなって、意外に大きな孤立の解毒剤となるのではないか。「人間の物語」に触れたい、その大きな輪に連なりたいと、コロナ禍の私たち誰もが切に願っている気がする。

◆テーマ2◆ ウィズ・コロナ／ポスト・コロナ時代の文学研究

ウィズ・コロナ下での「牧師の黒いヴェール」再考

倉橋 洋子（東海学園大学名誉教授）

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症のパンデミックに人類は振り回され、人との接触を避けるなどコロナを前提とした生活様式の変化を余儀なくされている。ホーソーンが「空想」を巡らして描いた人物には環境の変化に戸惑い、適応できない人もいる。ウィズ・コロナ下のマスク、インフォデミック、ソーシャル・ディスタンス、コミュニティ、分断などをキーワードにして「牧師の黒いヴェール」を読み直してみると、ウィズ・コロナ下の社会に通じるものがあるかもしれない。

「牧師の黒いヴェール」では、フーパー牧師はある日突然黒いヴェールで顔を隠して、教区民の前に現れる。ヴェールは、現代の感染予防のためのマスクから、16世紀から17世紀初期のヨーロッパの仮面劇（マスク）の仮面、ひいては古代ギリシャの仮面劇の仮面（ペルソナ）を想起させる。ヨーロッパの仮面劇には政治的、社会的な寓話が盛り込まれている。「牧師の黒いヴェール」の副題も「寓話」である。コミュニティの人が「顔を隠すだけで牧師は何か恐ろしいものになってしまった」と言っているように、フーパー牧師は、まるでヴェールだけで人間に対する評価が変化する社会実験を行っているようだ。牧師はコミュニティの指導者的立場にあり、影響力を持つがゆえに、コミュニティにはインフォデミックが発生し、やがて牧師は「秘密の罪」に苦しんでいるという噂が広がる。新型コロナ感染症第一波の時のように、未知のものや未経験なことに遭遇すると、不安なためにコミュニティはそれに支配され、混乱に陥る。

牧師は、婚約者のエリザベスにヴェールは「タイプ (type)」で「象徴」と言う。ヴェールは、人間の罪、欠点、悲しみ、病／感染症、顔の痣、いわゆる人間の苦悩／悲しみの象徴かもしれない。ピフォー・コロナの状態に戻るなら戻りたいと思うように、エリザベスは一度でいいからヴェールを取って欲しいと牧師に懇願する。ヴェールは、人間の苦悩／悲しみを可視化した物にすぎないが、牧師には可視化することに意義がある。牧師からヴェールを取ることは、「痣」において夫の科学者がジョージアナの美しさを完璧にしようと彼女の頬の痣を除去した結果、彼女を死に追いやることと違わない。牧師はヴェールを着けたままでエリザベスと

結婚し、ヴェールの下閉塞的な空間の孤独から解放されたかった。しかし、婚約者といえども、世間の噂を気にしているエリザベスには、黒いヴェールの存在は不可解そのものである。結局、フーパー牧師は、臨終の際にもヴェールを取らせまいとしたために、ヴェールとともに埋葬される。

また、牧師は「この暗い影は世間から私を隔離するにちがいない」とエリザベスに言う。牧師の本質、内面は変わらないが、外面の変化でコミュニティの大半の人々は牧師に恐怖心を抱き、牧師から距離（ソーシャルディスタンス）を置く。その一方で、フーパー牧師は、『緋文字』のディムズデルと同様に牧師として評価される。ディムズデルは孤独に秘密の罪を抱えているがゆえに、説教に真実味が増し、フーパー牧師はヴェールのもたらす孤独や疎外感を感じるがゆえに、苦しむ罪人の魂に共感でき、彼らに慕われる。ヴェールを着けた牧師を巡りコミュニティは分断する。

さらに、牧師のヴェールは顔、特に目を隠すがゆえに他者には表情がわからず、フーパー牧師の心の動きが読めない。すなわちフーパー牧師はヴェールの存在により、客観的に人間観察ができる観る側になる。それは、『ブライズデイル・ロマンス』のカヴァデイルが木の上に身を隠して観察をしているのと類似している。牧師には教区民に対してこれまで見えていなかったことが見えてくる。その結果、コミュニティの人々にもヴェールが象徴するものが存在することを確信する。この作品のクライマックスは、フーパー牧師が臨終に際して、みんなの顔に「黒いヴェール」があると叫ぶ場面にある。共有しているものを可視化した黒いヴェールを着けた牧師を詮索して遠ざかったコミュニティの人々を、牧師は咎めているかのようである。

「牧師の黒いヴェール」では、黒いヴェールによってコミュニティは混乱に陥るという社会現象を物語っている。この「寓話」は、新型コロナウイルス感染症によって引き起こされた社会現象に通じるものがあり、ウィズ・コロナ下の姿勢が問われる。

コロナ時代のホーゾン研究

丹羽 隆昭（京都大学名誉教授）

中学生の頃、人類の次に地球を支配するのはウイルスだという話を聞いた。理科の先生曰く、手洗いの方法を注意して、指先だけ軽く水に浸して済ますな、親指の付け根や手首までしっかり洗え、ウイルスは賢いから、洗い足りないところへ移動して、そこで悪さを始める。知能を持った生き物で、学習を繰り返して成長し、お前たちを怠け者から順番に倒してゆくかも知れんぞ・・・

当時はまるでSFみたいな話だったが、新型コロナの爆発的蔓延に世界が巻き込まれ、多数の犠牲者が出るに至った今、あの話はもはやSFどころか、身近な現実となった。生物か無生物か、ウイルスの正体は未詳である。しかし目に見えぬその存在が、人間の愚かさや弱点を侵入口として肺に到達するや、加速度的かつ再生不能的に破壊することで、宿主の命を絶つだけでなく、目に見えぬ恐怖で人間相互の不信や憎しみを煽り、絶望感まで醸成しながら、最後には全人類を滅ぼし、地球の次期支配者ともなりかねぬ勢いをすでに見せてさえいる。「ウィズ・コロナ」の時代は現在進行形だが、「ポスト・コロナ」という未来形の時代は、われわれが果たしてそこまで生き延びられるのか疑問とさえ言える。私のある友人は、まさか自分の生きている間に、人類全体の運命を左右しかねぬウイルスの蔓延を経験しようとは、思ってもみなかったと慨嘆するが、私も全く同感である。

ところで、ホーゾンの伝記上の問題点のひとつに、彼の死と死因がある。最近のコロナ禍を背景に改めてこれを考えると、何らかのウイルス感染の関与もあったのではないかとふと思ひ至る。リヴァプールでは、当時頻発した船内暴力から逃れて来た船員や、職にあぶれた同国人の訴えに「三密」状態で耳を傾けたり、かの地で病に倒れ瀕死の同国人を見舞ったり、死者の埋葬に立ち合ったりすることが領事の職務に含まれていた。旅行中のローマではマラリアに感染した長女ユーナを看病するうち、彼自身もその種の感染症に罹った可能性を

妻ソファイアが案ずる事態も生じていた。現代と違って衛生観念が極度に貧しかった港湾都市での公務と、その後の骨身にこたえる欧州遍歴とで計 6 年に亘り、多くの場所を訪れ、多くの人と交わった。元々頑健な体力と気力の持ち主ではあったが、それらをほぼ使い尽くしての帰国で、直後から彼の体調不良は始まり、死に至っている。心身共に疲弊した彼に何らかのウイルスが恰好の活躍の舞台を見出したかもしれない。

渡英直前に出版した『ブライズデイル・ロマンス』には、風邪で寝込んだ語り手カヴァデイルが、改革家ホリングズワースの親身な看護に感じ入り、こんな人を自分の「臨終の友」にできればいいかと告白する箇所がある。親友ピアスの選挙用伝記も同時に書いていたホーソーンは、作家経歴の絶頂にあつて、いずれ訪れる自分の死と「臨終の友」までも視野に収め、後者はピアスに決めた上で物語のこの箇所を書いたものと思われる。自らの死を凝視し、その有様を作品に投影するのがホーソーンの常套で、作家の自画像的主人公を待ち受ける過酷な試練とその果ての死が描き込まれている。それをアメリカの芸術家の肖像と捉えるのが普通だが、父親探求という自伝的要素と絡めた場合、そこには新大陸でのホーソーン家の罪の系譜も関わって来る。『七破風の家』の判事ジャフリーの死に関して、写真家ホールグレイヴは「この種の死に様は、過去何代にも亘って、一族の遺伝的特徴 (idiosyncrasy) だった」という印象的なコメントを残す。ピンチオン家の当主は、栄華の絶頂に突然「血を吐いて」死ぬのであり、それはまさに「神はヤツに血を飲ませなざるぞ！」という「モールの呪い」の実現なのだが、これを「卒中」と捉える研究者もいる。しかし「卒中」と「吐血」とは必ずしも結びつかない。むしろそれは、ホーソーンの父の命を奪った「ウイルス性感染症」たる「黄熱病」の末期症状のひとつで、それはホーソーンも熟知していたであろう。十七世紀の「大佐」や、十九世紀の「判事」の奇怪な「死に様」を描きつつ、ホーソーンは父祖たちのみならず、やがて訪れる自らの死をもまた凝視していたのではあるまいか。死の前年ホーソーンは 24 時間止まらない鼻からの出血を経験し、それを冗談で片付けていたものの、その後病が悪化し、1 年以内に世を去った、と息子ジュリアンは伝記『ホーソーンとその妻』で回顧している。謎めいた死と死因について、ウイルスとの関連で考え直すのも今後の課題のひとつになるかもしれない。

なってくるのが宇宙の定め

乗口 眞一郎 (北九州市立大学名誉教授)

今回のコロナウイルス禍が、人類撲滅の始まりとは思えません。何故ならば、人間は結構したたかで、過去にもかなりの流行病を克服し、しっかりと生き延びているからです。人間は頼もしい生物です。しかし、生き延びるには各人の免疫力の差が、大きな要になるようです。

朝日新聞では、コロナウイルスで出直している方たちの 87% 以上が、免疫力の弱い 85 歳以上の方たちです、とありました。私も危険信号が灯りはじめる年齢です。ところが、50 年以上ほぼ毎日、ジョギングをしているお陰で、ファミリー・ドクター曰く、「貴方の免疫力は、コロナウイルスなど、まったく寄せ付けませんよ。ご安心ください…」とのことでした。ついでに、5 年ぶりに高齢者健康診断を受けましたら、「どこも悪いところはあります。80 歳を過ぎて貴方のように、どこも悪いところがないのは、北九州市内でも珍しいでしょう…」と言われました。免疫力は、血液の流れ、睡眠、食事が大きく影響するそうです。ホーソーン文学に深く埋まり込み、運動不足の方は、どうぞ今日からでも、30 分間ほど散歩をしてください。ホーソーン大先生は 60 歳未満で出直しましたから、きっと創作活動にかまけて、運動不足だったのでしょう。

ところで、地球上のあらゆる現象は、大宇宙の神秘的な力のなせる業です。つまり、何が生じようと、絶対に不変の真理が 2 つありますね。1 つは、全ての生物は、絶え間なく変化し、その変化は絶対的であること。もう 1 つは、私たちの人生は、過去には戻れない一方通行の道を、ひたすら未来へ進んでいるということです。大宇宙の神秘の力には、人間的な知性も感性もありません。今回はその力が地球上に、ウイルス禍をもたらしたのです。私たちは、これを「新しい未来」を築き上げる新たなチャンスと受け止めたいものです。

では、私たちとしては、どのような変化を遂げるべきでしょうか。これまでの社会では、より便利でより豊かな環境を求めてきました。それで、私たちは幸せになったのでしょうか。欲望は膨らみ続け、ますます豊かな生活を求めてきました。ぼつぼつ、1日置きに働くか、午前か午後のどちらか働き、ゆったりのんびりとした生活に、変更してはいかがでしょうか。コロナウイルス禍を通して、宇宙がそのように問いかけているようです。

人は誰でも、雑草や樹木、犬猫牛馬と同様に、いつかはポッキッと折れ、枯れ果て、呼吸が止まり、現実とのご縁を閉じて大地へ帰ります。ただ、私たち人間だけが物を新たに造り、知的な活動を営みます。しかし、体力と時間の許す限り欲にまみれ、働き続ける現実の生活を再考するために、大宇宙が自粛の時間を与えて下さったのでしょうか。ですから、この貴重な機会を活かしたいものです。では、どう活かせばいいのでしょうか。私は便利と物質の豊かさを求めた経済活動中心の生活を、根本的に改革する時期の到来と受け止め、以下の4つを提案します。

1. 働く日を、月・水・金か火・木・土のどちらかを選択する
2. 生涯教育を無償で受けることができる
3. 世界から国境を無くし、教育・情報・文化活動を自由に行う
4. 世界の共通言語（英語・中国語など）と通貨を統一する

上記の変化をもたらせば、より人間らしく知的・文化的生活を営むことができるでしょう。これこそが、草木や犬猫と異なり人間として生命をいただいた、私たちの真の生き様だと思います。コロナウイルス禍がもたらした自粛の時間で、文学へ目を向けた人口は24.9%だと、朝日新聞で報じられていました。素晴らしいことです。人間の本来の資質である言語活動、つまり、文学的思考こそが、心と精神と魂の役割を遺憾なく果たすことになるでしょう。より人間らしく豊かに生活するために、多様な文学作品に勤しむようになるでしょう。そうです、文学の本格的な登場の機会がやってきたのです。ホーソーン文学研究者たちも、やっと出番が巡ってきたようです。嬉しいですね。頑張りましょう。

◆テーマ3◆ 遠隔授業と文学教育

遠隔授業と文学教育、もしくは文学と遠隔

高尾 直知（中央大学）

ご多分に漏れず、今年度はオンラインで授業をおこなっています。勤務先の大学はシスコ社のWebexというオンライン会議システムを採用推奨しているので、いわれるままにこれを使用しています。正直いうとZoomのほうが使い勝手がいいんですが、しかたありません。学内外ともに発言力はほぼ皆無なもので。

それで、遠隔授業でどんな工夫をしているか、というと……なにもしていません。千年一日で学生とテキストを読んでいます。

ただ、どのオンライン会議プラットフォームでもそうだと思いますが、気になるのは〈音声〉です。回線の具合で、ときおり声がヴォイスチェンジャーを通したようになってたり途切れたりする。はたまたミュートにしない学生のつぶやきが聞こえる。さらには、マイクの近くでなにか作業しているのか、カタコト、ガサゴソ、ゴトゴトと雑音がする……。

それで授業では、あえて、テキストの声色に注目したりしています。後期に入って大学院でブリッジの『アフリカ航海日誌』を読んだときに、次の一節に目を留めました。“In its metaphorical sense, indeed, I should be very far from casting such an imputation upon the zealous and single-minded missionary before me”

(*Journal of an African Cruiser*, 1845, p. 117). 現地人に引かせた人力車でやってきた宣教師に対して、「じつは伝道師らは、現地のひとの肩に乗っかろうと (ride on the necks of the people) しているのだ」という批判をよく聞くが、これほど文字通りの例を見たことがない、とあつけにとられた筆者のことばです。

そのことばの比喩的な意味（つまり現地人を使役し食べ物にしているという意味）で非難するつもりは毛頭ないんだけど……、といているわけですが、この I should be very far といういいまわしは、なんとも微妙。should が入っていて、事実そう思っているのかどうかは語られていない。現実目にした光景に、苦り切ったようすが目に浮かびます。こういうところに、編集者ホーソーンの色、つまり〈声色〉が聞こえる気がします。わざと読者と距離を作る、その間隙に響く声の音色に、耳を傾けるように仕向ける。

考えてみれば、まじめな文学って、ある種の遠隔教育じゃないでしょうか。文字という記録メディアを通じて、声の届かぬ遠くのひとに魂の声音を聞かせる、みたいな。その声色を聞くことが、読者に求められているでしょう。

遠隔授業のなかで、学生が（そしておそらく自分も）たてている騒音の障壁をくぐりぬけ、テキストに刻まれた作者編者の声を聞き取れたら……、そんなことを考えながら、きょうもパソコンの前でひとりごとをいうように、孤独に授業をおこなっています。

遠隔授業と文学教育を考える——欧米文化論のリモート体験記

中村 栄造 (名城大学)

4月初旬、あわただしく遠隔授業の導入が決まった。大混乱のなか試行錯誤を繰り返しつつ、なんとか前期を乗り越えることができたことに、いまは胸をなでおろしている。筆者が所属する理工学部では、後期開始に合わせて対面授業が再開され、現在も継続中である。以下は、文学の授業を担当していない教員の、たった1学期間の体験に基づく文章であることをお許し願いたい。

筆者の場合、与えられたテーマに隣接する担当科目は「欧米文化論Ⅰ」である。理工学部の学生を対象に、アメリカの文化特性を中心とした異文化学習を通じて、多角的・批評的視線を涵養し、ひいては自らと自らの文化を、客観的・相対的に眺めることを目標とする講義科目である。授業では、アメリカの諸状況に馴染みの薄い受講生がリアリティを感じられるように、映画、TV番組、ラジオドラマ、アニメからコミックまで、さまざまなメディアを積極的に利用してきた。もちろん、文学作品にも多く言及した。

リモートでの教材提示は、作成したパワーポイントをPDF変換してアップする形で対応した。ネットに拡散する恐れがあるため、著作権に配慮して、撮りためた動画の使用は断念した。そもそも前期はサーバー容量の関係で、動画アップは控えるよう指示を受けていた。教材作成の際は、写真や図版、引用文の出典確認作業を行いつつ、見えそうな動画をネットで必死に探してURLのみを記載して、学生に各自閲覧を求めた。現時点でも、同様の苦勞を強いられている教員は少なくないと拝察する。

本学では、WebClassというeラーニング・システムを採用している。機能のひとつに「会議室」がある。基本的には出席確認に使用するものだが、質問や感想を書かせたりすることもできる。「わからない」と書いてくる学生には、「わかるまで」何度も教材やテキストを読み込むように指示し、時間をおいて個別に対応した。鋭い質問には、次回の教材に教員の見解を組み込んだ。受講生は120名いたが、皮肉なことに、対面授業と比べ、教員と受講生のあいだで1対1のコミュニケーションが円滑にとれたことには驚いた。最終レポートも、例年よりも出来のよいものが多かった。これらの点も、遠隔授業担当者の共通体験かもしれない。

ここ数ヶ月、遠隔教育の「質向上」を目指すオンライン学習会が頻繁に開催され、自撮動画をGoogleドライブにアップしてWebClassからリンクを張る方法、WebClassとスプレッドシートとの連携方法、WebClassにデフォルト設定されたポートフォリオの活用方法等、新卒のテクニックが次々と紹介されている。こうした学

習環境の劇的変化が、文学教育に質的変容をもたらすかどうかは、現在のところ未知数である。今後の創意工夫や努力次第といったところだろうか。なにしろ筆者は、文学教育とは精緻なテキスト・リーディングとともにある、と固く信じて疑わない人間なのである。

文学には、極限状況に置かれた人間の生きざまを読者に伝える力が宿っている。文学教育は、〈見知らぬ状況に置かれた他者の情念〉に〈皮膚感覚〉を通じて触れる、類まれなる知的トレーニングの現場でもある。「正常性バイアス」や「同調圧力」が暴走しかねないコロナ禍のいまこそ、文学（教育）の意義を（再）確認する絶好の機会だろう。ただし、遠隔授業を通じてその道を模索するには、途方もない労力、深刻な運動不足、腰痛が伴うことは覚悟しておいた方がよさそうだ。

◆テーマ4◆ オンライン学会と文学研究

捨てる神あれば拾う神あり——オンライン学会

佐々木 英哲（桃山学院大学）

研究者は一つの論考を世に問うにあたって、少なくとも 2 回勝負に臨む。最初の勝負は学会での発表、次の勝負は学会誌への投稿だ。自分の場合、先鋭化、暴走化するきらいがあるせいか、学会発表では自分と対蹠的な視座に論陣を張る側からの容赦ないコメントで手荒な洗礼を浴びることも、ままあるが、おかげで論拠が手薄の個所、論理の飛躍がある個所が浮き彫りになる。研究者にとって、学会発表が自らの考えを修正、補強する絶好の機会であることは、論を俟たない。

卑近な例で恐縮だが、2018 年に引き続き、2020 年 5 月 21 日から 24 日にかけて、ALA (The American Literature Association) 大会の“Hawthorne and Fatherhood”パネルに於いて、“The Sacred Father Degendered: Chillingworth in *The Scarlet Letter*”なるタイトルで発表することになっていた。2 月時点のアメリカは今ほど深刻な状況ではなかったが、いよいよ雲行きが怪しくなり始めた 3 月下旬に、案の定、中止の連絡が入った。（その後、年の瀬も押し迫った頃、「2021 年 5 月の ALA で同じパネルを企画しているが、発表可能か」、との問い合わせが The Hawthorne Society からあった。残念ながら勤務校から事実上の海外渡航禁止令が出ており、発表は断念せざるを得なかった。）また、別の国内学会では、当方の勤務校を会場とし、当方も発表者の一人に名を連ねていた 11 月の全国大会が、6 月時点で中止を余儀なくされた。

何を隠そう、日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部開催の 7 月例会では、「エディプス惨劇の不条理性を読み解く——ホーソーンの「ロジャー・マルヴィンの埋葬」」を発表させていただくことになっていた。だから一時は暗澹たる気持ちに襲われた。そのような折も折、事務局の野崎直之先生、内堀奈保子先生、鈴木孝先生から、7 月例会を 9 月に延期したうえで、Zoom 開催にしてはどうかとご提案いただいた。渡りに船とばかり、二つ返事で承諾した。この朗報はコロナ禍で戦意を喪失し悶々としていた私にとって、強力なカンフル剤となった。

今回、オンライン式でも対面式に遜色ない効果が期待できると判明した。オンライン学会で大きくものを言うのは画面共有なる機能である。これにより参加者は発表者のプレゼンを傾聴しつつ、配布資料にも目を走らせることが可能となる。さらにオンライン学会は思わぬ副次的効果をもたらした。実際、今回、遠方の会員にも参加していただくことができたのは、オンライン学会ならではのものと断言できる。

だが、こうしてオンライン学会について御託を縷々並べたると、したり顔の自分が目に浮かんでくるようで、何とも気恥ずかしい。なにせ、東京支部から Zoom 開催の提案をいただいた 6 月時点では、当方の場合、まだまだ Zoom 操作に不慣れで一人では使いこなせなかったのが、偽らざる事実なのだから。しかし事務局の先生方から手厚い支援を受け、滞りなく発表し終えることができた。また富樫壮央先生には、スパイスを利かせた歯切れのいい司会ぶり、会を盛り上げていただいた。先生方にはあらためて深謝したい。

東京支部研究会

2020年、東京支部研究会では下記の活動を行いました。今回の研究会は9月以降、新型コロナウイルスの感染拡大防止のためZoomを利用した開催となりましたが、どの会も通常開催と遜色ない、大変充実したものになりました。11月には談話会を開催し、高尾直知先生にご著書についてお話しいただきました。12月開催の読書会では、3名の発表者が、それぞれ異なる研究書から主にホーソーンを論じている章を取り出し、そこで論じられている要点を様々な視点から紹介してくださいました。2021年も、研究発表・作品研究・招待講演・読書会を開催する計画です。

△2020年2月29日(土)午後3時より(於 大正大学2号館6階人文学科閲覧室)

【研究発表】

(1) 発表者: 常光 健 氏 (中央大学大学院生)

題 目: 『緋文字』に息づくインディアンの表象

(2) 発表者: 藤村 希 氏 (亜細亜大学)

題 目: 「ホーソーンのトランスナショナル・アメリカ——*The American Claimant Manuscripts* 再考」

司 会: 大野 美砂 氏 (東京海洋大学)

△2020年9月12日(土)午後3時より (Zoom ウェビナーを使用するオンライン開催)

【研究発表】

発表者: 佐々木 英哲 氏 (桃山学院大学)

題 目: 「エディプス惨劇の不条理性——ホーソーンの「ロジャー・マルヴィンの埋葬」

司 会: 富樫 壮夫 氏 (日本大学非常勤講師)

△2020年11月28日(土)午後3時より (Zoom ミーティングを使用するオンライン開催)

【談話会】

報告者: 高尾 直知 氏 (中央大学)

題 目: 『『嘆き』はホーソーンによく似合う』をめぐって」

司 会: 野崎 直之 氏 (中央大学非常勤講師)

△2020年12月19日(土)午後3時より (Zoom ミーティングを使用するオンライン開催)

【読書会】

司 会: 大野 美砂 氏 (東京海洋大学)

発表 1: 伊藤 淑子 氏 (大正大学)

Pacheco, Derek. “Disorders of the Circulating Medium”: Hawthorne’s Early Children’s Literature.” *Moral Enterprise: Literature and Education in Antebellum America*. (Ohio State UP, 2013)

発表 2: 小宮山 真美子 氏 (長野工業高等専門学校)

Pratt, Lloyd. “A Magnificent Fragment”: Dialects of Time and the American Historical Romance.” *Archives of American Time: Literature and Modernity in the Nineteenth Century*. (U of Pennsylvania P, 2010)

発表 3: 笠原 慎一郎 氏 (昭和女子大学非常勤講師)

Levine, Robert S. “Antebellum Rome: Transatlantic Mirrors in Hawthorne’s *The Marble Faun*.” *Race, Transnationalism, and Nineteenth-Century American Literary Studies*. (Cambridge UP, 2018)

(鈴木 孝 記)

中部支部研究会

2020年度は、新型コロナウイルス感染症のために、7月に開始予定の研究会が延期になり、12月に開催しました。ウィズ・コロナの時代が続くようであれば、開催方法を考慮しなければならないと痛感しております。

△2020年1月25日（土）午後2時より（於 名城大学塩釜キャンパスタワー75 1003）

【研究発表】

発表者：大場 厚志 氏（東海学園大学）

題 目：「E・A・ポーの作品の映画化について——「アッシャー家の崩壊」を中心に」

司 会：倉橋 洋子 氏（東海学園大学名誉教授）

△2020年12月26日（土）午後2時より（於 東海学園大学4号館2階424講義室）

【研究発表】

発表者：倉橋 洋子 氏（東海学園大学名誉教授）

題 目：「ホーソーンと友人たちについて」

司 会：竹野 富美子 氏（東海学園大学）

（倉橋 洋子 記）

関西支部研究会

関西支部では年4回のペースで支部研究会を開催しており、先生方にご発表準備を頂いておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大に鑑み、まことに残念ながら順次、次年度に延期といたしました。そうした中、オンライン開催の試みが広まり、関西支部でも、みなさまのご協力とご理解のもと、12月例会についてはオンラインで実施することができました。おかげで多くのご参加を頂きましたが、今後も状況に応じた方法で支部活動の継続を図りたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

△2020年12月13日（日）午後2時より（Zoomによるオンライン開催）

【研究発表】

(1) 発表者：竹井 智子 氏（京都工芸繊維大学）

題 目：「ヘンリー・ジェームズの「ブルックスミス」と一貫性の呪縛」

司 会：中西 佳世子 氏（京都産業大学）

(2) 発表者：丹羽 隆昭 氏（京都大学名誉教授）

題 目：「晩年のホーソーンとその死をめぐる」

司 会：中西 佳世子 氏

（中西 佳世子 記）

九州支部研究会

九州支部では、本年度の研究会開催はありませんでした。

（青井 格 記）

事務局だより

1. *NHSJ Newsletter* 第 39 号をお届けします。
2. 第 38 回全国大会は、2020 年 5 月 15 日（金）・16 日（土）の両日に沖縄県的那覇市ぶんかテンプス館 4 階テンプスホールで開催する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止とさせていただきます。開催に向けて大会運営にご尽力いただいた皆さまにこの場をお借りして深く御礼申し上げます。
3. 次回第 39 回全国大会は、2021 年 5 月 21 日（金）・22 日（土）の両日に新宿区立角管区民ホールにて開催予定です。詳細は本 *Newsletter* 14-15 頁「第 39 回大会のお知らせ」、並びに、来年度にご連絡いたします大会案内をご確認ください。ただし、新型コロナウイルスの感染状況によっては、予定を変更することがございます。変更の場合には、学会サイトや支部連絡網にてご連絡させていただく予定です。感染が早く収束し、会場で多くの会員の皆さまとお会いできることを祈っております。
4. 住所変更やご所属の変更がございましたら、事務局へご一報ください。
5. 会員の方々のご著書・論文等は、資料室にお送りくださるようお願いいたします。
6. 本年度、ホーソーン協会に多大な貢献をされてきた入子文子先生の訃報に接しました。ここにご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

入子 文子 氏（2020 年 3 月 29 日 享年 78 歳）

1942 年生まれ。お茶の水女子大学卒業。甲南大学大学院修士課程修了。2005 年お茶の水女子大学博士号（人文科学）取得。阪南大学助教授、神戸海星女子学院大学教授を経て、関西大学教授。定年退職後は関西大学アジア文化研究センターで研究を続けた。日本ナサニエル・ホーソーン協会元理事。単著書に『ホーソーン・《緋文字》・タペストリー』（南雲堂 2004 年）、『アメリカの理想都市』（関西大学出版部 2006 年）、『メラニコリーの垂線 ホーソーンとメルヴィル』（関西大学出版部 2012 年）、共著書に『水と光 アメリカの文学の原点を探る』（開文社 2013 年）など。

（鈴木 孝 記）

編集室だより

ことしは、自粛生活・遠隔授業の影響のせいか投稿論文は一本でした。でも編集委員はいつもと変わらぬ熱意を持って、粛々と審査中です。書評については 3 本を掲載予定です。感染症の収束が見通せずに、とくに若い研究者のかた、将来をいまだに探られているかたには落ちつかないことだと思いますが、むしろこういう時期こそチャンスと捉えて積極的な投稿を期待します。いつもながら、投稿して下さったかた、書評執筆をおひき受けいただいたみなさま、さらに、お忙しいなかで詳細なコメントをくださる編集委員のみなさまに、お礼を申し上げます。

投稿にあたっては、事務局 (jimukyoku.hawthorne@gmail.com) 宛の電子メールに、Microsoft Word 書類 (.doc/.docx 形式) として作成した論文を添付してご提出ください。匿名審査のため、投稿者に関する情報（氏名、ご所属、住所、メールアドレス、電話番号）は、論文本文およびシノプシスには記さず、電子メールの本文に書いてください。詳しい投稿規定は、日本ナサニエル・ホーソーン協会ホームページに記載されていますので、かならずそちらをご参照ください。スタイルは *MLA Handbook* 第 8 版に準拠していただきますように。

- ・編集委員：城戸光世、佐々木英哲、高尾直知（委員長）、竹野富美子、中西佳世子、古屋耕平
- ・編集室：〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

中央大学文学部 高尾研究室気付 日本ナサニエル・ホーソーン協会編集室

（高尾 直知 記）

資料室だより

これまでに下記の著書をご寄贈いただきましたので、ご報告いたします。

高尾直知『〈嘆き^{モエニング}〉はホーゾンによく似合う』中央大学出版部（2020）

竹内勝徳『メルヴィル文学における〈演技する主体〉』小鳥遊書房（2020）

西山けい子『エドガー・アラン・ポー——極限の体験、リアルとの出会い』新曜社（2020）

ご協力をありがとうございました。

資料室を充実させてゆきたいと存じますので、今後とも皆様のご協力をお願いいたします。著書上梓の折にはご書名等を、論文ご執筆の折にはタイトル等を、下記の資料室までお知らせ頂けると幸いです。

日本ナサニエル・ホーゾン協会資料室

〒981-8557

宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘 9-1-1

宮城学院女子大学 学芸学部英文学科 田島優子研究室内

電話：022-277-6111（研究室直通）

Eメール：y-tashima@mgu.ac.jp

（田島 優子 記）

第 39 回大会のお知らせ

日 時：2021 年 5 月 21 日（金）、22 日（土）

場 所：新宿区立角筈区民ホール

（〒160-0023 新宿区西新宿 4-33-7 電話：03-3377-1372）

《第 39 回大会概要》

2021 年の全国大会は東京での開催となります。昨年の春以降、日本のみならず世界中がコロナ禍という未曾有の危機に見舞われていますが、ワクチン開発に関するよいニュースが入ってきていますし、次の大会こそは対面での交流ができることを祈っております。ただし、感染状況によってはオンライン、あるいは、オンラインと対面のハイブリッド形式を採用する可能性もございます。皆様にはホームページやメール等で最新の情報をお伝えいたしますので、その都度ご確認くださいませよう、お願い申し上げます。

2020 年の沖縄での全国大会が中止となったため、ワークショップ、特別講演、シンポジウムの内容は、そのまま 2021 年の大会に引き継がせていただきます。個人発表はあらたに募集いたします。特別講演は、下河辺美知子先生（成蹊大学名誉教授）にご登壇いただきます。ワークショップでは、「ロジャー・マルヴィンの埋葬」をテキストに選び、生田和也先生（鹿児島女子短期大学）、小宮山真美子先生（長野工業高等専門学校）、高橋愛先生（岩手大学）が再読の可能性について議論されます。シンポジウムは、上原正博先生（専修大学）と武田悠一先生（元南山大学教授）の「特別対談」に変更して開かれます。会員の方々の多数のご参加をお願い申し上げます。

【第 1 日】

- ・開会のことば
- ・研究発表（発表を希望される方は、下記の応募規定に従い、ふるってご応募ください）
- ・ワークショップ

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」を再読する

司会・講師：生田 和也 氏（鹿児島女子短期大学）

講師：小宮山 真美子 氏（長野工業高等専門学校）

講師：高橋 愛 氏（岩手大学）

<概要>1832 年に『トークン』に発表された「ロジャー・マルヴィンの埋葬」は、これまでも父子関係や歴史的背景など様々な角度から論じられてきています。今回のワークショップではこの作品の新たな読みの可能性を探るべく、これまで主に 19 世紀アメリカ文学における子ども、メイン州、吊いの儀式、ジェンダー、セクシュアリティなどのテーマに関心を寄せてきた講師が集まりました。ワークショップでは、最初に講師 3 名が作品に関する短い発表（発案）をします。その後、フロアのみなさまと活発な議論をできればと願っています。また聴衆のみなさんからご意見をいただく際に、オンラインツールである Mentimeter を用いる予定です。特別な準備はいりませんが、インターネット通信のできるスマートフォン、タブレット、PC などを是非お手元にご用意ください。

- ・特別講演

講演者：下河辺 美知子 氏（成蹊大学名誉教授）

演 題：十九世紀アメリカ人はどこに立っていたのか？—— Chronotopic Cartography の可能性

- ・総会
- ・懇親会：開催しません

【第2日】

・特別対談

ホーソーンを読むこと——倫理か、理由（わけ）か、理不尽か

司会・講師：上原 正博 氏（専修大学）

講師：武田 悠一 氏（元南山大学教授）

〈概要〉小説を読むという営みはどのようなものか。自責の念をこめた問いから、この企画は生まれた。現下の人文科学系領域への強い風当たりを受けて、研究として現れてくる読みの実践を眺めたとき、はたして小説に真摯に向き合うことを忘れてはいないだろうか。脱構築以後、当節みられる読みの多くは、史的読み返し、読みを歴史化せよ、という申し立てに答えようとするものであるが、その根幹となる読みの姿勢へのふり返りが見られなくなっているのではないか。こうした戸惑いのなか、作品の声に耳を澄ましながら研究活動を続けてこられた先達は、いまどのようにホーソーンを読むだろうか、と思わずにいられない。本対談は、その読みの実践を「生の声」を通して知る機会となるだろう。こうしたふり返りこそ、文学を読むことの意義を問い直すことが要請されている時代に必要な姿勢ではないか。いまや銀髪となられた、かつてのグッドマン・ブラウンの「生の声」に誘われながら、ホーソーン作品と向かい合う機会になることを願っている。そして、そこから何かを盗み取ることができたなら、その行為にこそ、読みの醍醐味があることを実感することにもなるだろう。

・閉会のことば

〈発表応募規定〉

1. 発表者は会員であること。
2. 発表内容は未発表のものに限り、発表時間は1人25分以内（質疑応答を含まない）とします。
3. 応募書類

①発表要旨：横書きで日本語800字程度、もしくは英語400words程度にまとめたもの。

②略歴：氏名（ふりがな）、勤務先、職名（学生の場合は所属先、身分）、連絡先（住所、電話番号）を明記したもの。

上記2点を大会準備委員会までEメールに添付してお送りください。

応募先（問い合わせも）：辻 祥子（松山大学）E-mail: tsuji@g.matsuyama-u.ac.jp

4. 応募締切：2021年2月末日（必着） 選考結果は3月中に応募者にお知らせします。
5. 大会の開催地区以外に居住している大学院生会員が研究発表（ワークショップ、シンポジウムを含む）をする場合、交通費の一部を協会が助成いたします。今大会では、関東以外の地域に居住している大学院生が対象となります。助成希望の方は事務局までご連絡ください。

〈大会準備委員会より〉

シンポジウムとワークショップのテーマや人選につきましては、各支部からの発案を積極的に行っていただきますよう、よろしくお願いたします。以下に、発案の要綱を再掲しておきます。

- 1) 各支部からの発案（テーマ、人選など）は複数でもよいし、発案しなくてもよい。
- 2) 各支部からの発案の選考や具体化（実施年度の決定など）は大会準備委員会で行う。
- 3) 各支部からの発案と大会準備委員会の発案との調整やコーディネートは、大会準備委員会が行う。
- 4) 機械的、強制的な支部間のローテーション制とはしない。

（辻 祥子 記）

追 悼 抄

先生のランプ ——入子先生を偲んで——

植村 真未（大阪大学非常勤講師）

3月中旬、まだ2020年度のホーソーン協会の方針が決まる少し前、スマートフォンの画面が点灯し、着信を知らせる。私のコメンテーターとして登壇していただく予定だった研究会のことについて、入子先生から電話だった。方針や締切、堅い決め事はなく、関西大学での講義から変わらないスタイルで、「自由にやればいいから。私もあなたと同じように、一生懸命読むだけだから」と。2週間程後、先生からメールが来る。けれど、それは入子先生ご本人からではなかった。眼前が闇に包まれていくようだった。

ご息からのメールは、その3月に刊行予定だった『ホーソーン研究』の編集でやりとりをしていた連絡先に送られていた。関西大学でのゼミ生を母体としながらも、「ホーソーンを読みたい人は誰でも」というモットーの元に、先生が主催されてきた研究会で綴った冊子である。退官後も、「若い人のために」と常に仰り、私たちのために学びの場を作り、道を照らし、導いて下さった。

しばらくして、その冊子に先生が投稿予定だった論文が、完成まであとわずかの状態だったことが判る。私を含め下を向いていた研究会のメンバーに、先生が残されたミッションであった。先生は、ご自身の思考の跡を辿らせることで、私たちに、これまで以上に研究の道筋を明るく示して下さい。ここで、私たちは入子先生の論考を形にはしたが、きっとそれは、先生が天上で完成させられたものには遠く及ばない。

眩しく射す照明が消えた夜、拙宅の寝室は、スタンドガラスのランプの、ちいさく、あたたかい、やわらかな光に包まれる。入子先生から結婚祝いにと頂いたものである。「神戸の商店街でね、これだ！と思って。40ワットくらいがいいと思う。」にこやかな笑顔を私は決して忘れない。この光の下の中間地帯で、先生とお話できることを願って。

ファンショアの天国 ——入子文子先生追悼——

巽 孝之（慶應義塾大学）

入子先生の絶筆『ファンショア』の新たな地平——名前を追って』（「ホーソーン研究」第7号、2020年1月）を読み終えて、変わらぬ論証力に感嘆しながら、とりわけ末尾の「神との出会いを目指してひたすら研究にいそしんだファンショアが見つけた幸せの星は、キリストの星、すなわち天国なのである」という一文には心揺さぶられた。ファンショアの姿に著者自身が重なったからである。

四半世紀にわたり数々の学会企画や共著企画でご一緒し、三田の米文学演習では二度も講演して下さい（下記HP参照 <http://panicliterati.tatsumizemi.com/p/11.html>）。今年2020年の1月には東大駒場で行われた南雲堂編集部長・原信雄氏を偲ぶ会で再会したばかり。それから3ヶ月もしないうちに旅立ってしまわれるとは！

晩年の入子先生と決まって語り合った話題はただ一つ。オックスフォード運動の指導者ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿のことである。父・巽豊彦がその主著『アポロギア』の本邦初訳を行い生涯の研究対象としたこの革命的聖職者は、いつしか入子先生のホーソーン研究には不可欠な存在となっていた。『アポロギア』の邦訳が手に入らない、何とかしてくれと苦情を言われたこともある。きっと今ごろ天国では、父に直接談判しておられるに違いない。

入子先生を偲んで

中村 善雄（京都女子大学）

『緋文字』第12章の天翔ける流星が神意であるならば、入子文子先生の訃報に接した時、私の心に映じた巨星墜つの光景もまた定めなのであろうか。神意と言うにはあまりに残酷で、容赦ない時の洗礼をひと感じていて。

入子先生は私の暗澹たる研究者人生の始まりを照らして下さった導き手であるが、先生との思い出を振り返ってみると、今でも大事にしている一言がある。「他流試合をしなさい」という言葉である。内気で自信のなかった（今でも多分にそうであるが）私に対して、常に新しい挑戦をすることの必要性を教えて下さった。折に触れ、仕事で行き詰まった時や判断に困る時、この言葉を胸に刻んで、自らを鼓舞している。

さてご存命の折、入子先生が単著に纏めようとした遺稿が存在する。ご承知のように、『緋文字』論にて入子先生はヘスターの墓を巡る文学的想像力を駆使されたが、墓標の下で単著が世に出ないままの先生の胸中を察すると、その無念たるや如何ばかりであろう。今、その遺作の出版に向けて、先生原稿を読み返しており、むしろご生前の頃以上に先生の息遣いを感じ、身近に「対話」をしている。残された者としては、それを形にし、墓前に捧げることがせめてもの供養になると信じながら。

エリヤのごとく

水野 眞理（京都大学名誉教授）

私には、自分が在籍した大学の先生よりも多くのご教示をいただいたと感じる先生が二人あります。阪大の藤井治彦先生と、そして関大の入子文子先生です。

藤井治彦先生にはエドマンド・スペンサーを研究していこうと決めたころに、その楽しさと困難とを教えてくださいました。入子文子先生には、スペンサーを好んで読んでいたというホーソーンの研究へと道を開いていただきました。駆け出し時代の分野の異なる私をもシンポジウムや論集にお誘い下さり、ご自身を始めとする優れたホーソーン研究者の世界に導き入れていただいたのです。

藤井先生も入子先生も信仰篤いクリスチャンであられました。入子先生のカトリック的なものの見方——本質は形に現れるという世界観——は、ホーソーンのようなカトリックではない作家でも、そのアレゴリーを直観的に読み解くことに力を発揮していました。私はカトリックという点で入子先生に近い位置にあり、入子先生の前では信仰のことを口にすることを憚る必要がありませんでした。先生が急逝なさったと伺った時に頭に浮かんだのは、神が預言者エリヤをつむじ風にのせて天へ取り上げられた、という旧約の挿話でした。そう、入子先生は間違いなく神の手で天国に引き上げられたと思います。ご逝去は悲しいことですが、先生が大きなお恵みを受けられたと私には感じられるのです。そうでしょうか？入子先生！

2019年度 日本ナサニエル・ホーソーン協会 会計報告

(2019. 4. 1 ~ 2020. 3. 31)

収入			支出			
会費	750,000		『フォーラム』関連費	209,816	前期繰越金	3,114,415
賛助会員	60,000		(印刷製本費)		収入計	993,509
雑収入	183,500		大会費	54,047	計	4,107,924
利息	9		大会準備委員会費	0	支出計	522,147
計	993,509		印刷費	58,981	次期繰越金	3,585,777
			国際渉外室費	10,000		
			謝礼費	30,000		
			支部研究会費	40,000	キャッシュポジション	
			(東京、中部、関西、九州	各 10,000	郵便貯金	2,513,643
			通信費	72,634	みずほ銀行普通預金	847,366
			事務費	26,669	現金	224,768
			人件費	20,000		
			雑費	0		
			計	522,147		

上記の通り相違ありません

2020年3月31日

会計 大川淳 高橋愛

監査の結果、上記の通り相違ないことを証明します

2020年4月1日

監事 中村栄造 大野美砂

*大会費のうち、45,500円は第38回大会(沖縄)の会場使用料であるが、大会中止に伴い全額払い戻しされることとなった。

顧問 島田太郎（東京大学名誉教授） 當麻一太郎（元日本大学教授） 丹羽隆昭（京都大学名誉教授）

役員

会長	西谷拓哉（神戸大学）	事務局	鈴木孝
副会長	高尾直知（中央大学）		生田和也（鹿児島女子短期大学）
	城戸光世（広島大学）		稲富百合子（追手門学院大学）
監事	大野美砂（東京海洋大学）		内堀奈保子
	中村栄造（名城大学）		川村幸夫
理事	内堀奈保子（日本大学）		小宮山真美子（長野工業高等専門学校）
	大場厚志（東海学園大学）		富樫壮央（日本大学非常勤講師）
	川村幸夫（東京理科大学名誉教授）		中村文紀（日本大学）
	佐々木英哲（桃山学院大学）		野崎直之（中央大学非常勤講師）
	鈴木孝（日本大学）	会計	大川淳（京都ノートルダム女子大学）
	高橋利明（日本大学）		高橋愛（岩手大学）
	辻祥子（松山大学）	編集委員	高尾直知
	中西佳世子（京都産業大学）		城戸光世
	中村善雄（京都女子大学）		佐々木英哲
	成田雅彦（専修大学）		竹野富美子（東海学園大学）
	橋本安央（関西学院大学）		中西佳世子
	藤村希（亜細亜大学）		古屋耕平（神奈川大学）
		資料室	竹井智子（京都工芸繊維大学）
			田島優子（宮城学院女子大学）
		国際渉外室	伊藤淑子（大正大学）
			上原正博（専修大学）
		大会準備委員	大野美砂
			辻祥子
			中村善雄
			橋本安央